

「中田英寿とテレアの業務内容の関係」



“人生とは旅であり、旅とは人生である”

2006・7・3

～1985年12月1日～2006年6月22日～

俺(おれ)が「サッカー」という旅に出るからおよそ20年の月日が経った。8歳の冬、寒空のもと山梨のとある小学校の校庭の片隅からその旅は始まった。あの頃(ころ)はボールを蹴ることに夢中になり、必死でゴールを決めることだけを目指した。そして、ひたすらゲームを楽しんだ。サッカーボールは常に傍(かたわ)らにあった。この旅がこんなに長くなることは俺自身思いも寄らなかった。山梨の県選抜から関東選抜、U-15、U-17、ユース、そしてJリーグの一員へ。その後、自分のサッカー人生の大半を占める欧州へ渡った。五輪代表、日本代表へも招聘(へい)され世界中のあらゆる場所で行くつもゲームを戦った。

サッカーはどんなときも俺の心の中心にあった。サッカーは本当に多くのものを授けてくれた。喜び、悲しみ、友、そして試練を与えてくれた。もちろん平穏で楽しいことだけだったわけではない。それ故に、与えられたことすべてが俺にとって素晴らしい“経験”となり、“糧”となり、自分を成長させてくれた。半年ほど前からこのドイツワールドカップを最後に約10年間過ごしたプロサッカー界から引退しようとしていた。

何か特別な出来事があったからではない。その理由もひとつではない。今言えることは、プロサッカーという旅から卒業し“新たな自分”探しの旅に出たい。そう思ったからだった。サッカーは世界で最大のスポーツ。それだけに、多くのファンがいて、また多くのジャーナリストがいる。選手は多くの期待や注目を集め、そして勝利の為(ため)の責任を負う。時には、自分には何でも出来るかと錯覚するほどの賞賛を浴び、時には、自分の存在価値を全て否定させられるような批判に苛(さい)まれる。

プロになって、自分、「サッカー、好きですか?」と問われても「好きだよ」とは素直に言えない自分がいた。責任を負って戦うことの尊さに、大きな感動を覚えながらも子供のころに持っていたボールに対する瑞々(みずみず)しい感情は失われていった。

けれど、プロとして最後のゲームになった6月22日のブラジル戦の後、サッカーを愛して止まない自分が確かにいることが分かった。自分でも予想していなかったほどに、心の底からこみ上げてきた大きな感情。それは、傷つけないようにと胸の奥に押し込めてきたサッカーへの思い。厚い壁を築くようにして守ってきた気持ちだった。

これまでは、周りのいろんな状況からそれを守る為、ある時はまるで感情が無いかのように無機能的に、またある時には敢えて無愛想に振る舞った。しかし最後の最後、俺の心に存在した壁は崩れすべてが一気に溢(あふ)れ出した。ブラジル戦の後、最後の芝生の感触を心に刻みつつ込み上げてきた気持ちを落ち着かせたのだが、最後にスタンドのサポーターへ挨拶(あいさつ)をした時、もう一度その感情が噴き上がってきた。

そして、思った。
どこの国のどんなスタジアムにもやってきて声を囁(ささ)らし全身全量で応援してくれたファン。世界各国のどのピッチにいても聞こえてきた「NAKATA」の声援。本当にみんながいたからこそ、10年もの長い旅を続けてこられたんだ、と…

サッカーという旅のなかでも「日本代表」は、俺にとって特別な場所だった。最後となるドイツでの戦いの中では、選手たち、スタッフ、そしてファンのみんなに「俺は一体何を伝えられることが出来るのだろうか」、それだけを考えてプレーしてきた。

俺は今大会、日本代表の可能性はかなり大きいものと感じていた。今の日本代表選手個人の技術レベルは本当に高く、その上スピードもある。ただひとつ残念だったのは、自分たちの実力を100%出す術(すべ)を知らなかったこと。それにどうにか気づいてもらおうと俺なりに4年間やってきた。時には励まし、時には怒鳴り、時には相手を怒らせてしまったこともあった。だが、メンバーには最後まで上手に伝えることは出来なかった。

ワールドカップがこのような結果に終わってしまった、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。俺がこれまでサッカーを通じてみんなに何を見せられたのか、何を感(あ)げられたのか、この大会の後にいろいろと考えた。正直、俺が少しでも何かを伝えることが出来たのか……ちよつと自信がなかった。

けれどみんなからのmail(メール)をすべて読んで、俺が伝えたかった何か、日本代表に必要なと思った何か、それをたくさんの人が理解してくれたんだと知った。それが分かった今、プロになってからの俺の“姿勢”は間違っていないと自信を持って言える。

何も伝えられないまま代表としてサッカーから離れる、というのはとても辛いことだと感じていた。しかし、俺の気持ちを分かってくれている“みんな”がきっと次の代表、Jリーグ、そして日本サッカーの将来を支えてくれると信じている。だから今、俺は、安心して旅立つことができる。

最後にこれだけは伝えたい。
これまで抱き続けてきた“誇り”は、これからも俺の人生の基盤になるだろうし、自信になると思う。でもこれは、みんなからの“声”があったからこそ守ることが出来たものだと思う。

みんなの声を胸に、誇りを失わずに生きていく。
そう思えばこそ、この先の新たな旅でどんな困難なことがあろうと乗り越えていけると信じられる。

新しい旅はこれから始まる。
今後、プロの選手としてピッチに立つことはないけれどサッカーをやめることは絶対ないだろう。旅先の路地で、草むらで、小さなグラウンドで、誰かと言葉を交わす代わりにボールを蹴るだろう。子供の頃の瑞々(みずみず)しい気持ちを持って…

これまで一緒にプレーしてきたすべての選手、関わってきたすべての人々、そして最後まで信じ応援し続けてくれたみんなに、心の底から一言を。
“ありがとう”

サッカー日本代表の中田英寿選手の現役引退文です。全力を出し尽くした人間の清々(せいせい)しさが表われていると思います。この中田選手の文章の中で一番印象に残った文をあげるとすると『時には励まし、時には怒鳴り、時には相手を怒らせてしまったこともあった。だが、メンバーには最後まで上手に伝えることは出来なかった。』のところです。彼はこれから新しい自分探しの旅に出ることになりますが、世界中どこを旅しようと、どんなビジネスを始めようと、頭の中は必ずこの1文と対面していることと思います。完璧主義者の中田選手からにじみ出るこの悔しさは必ずこれからの彼の歩みの原動力になると思います。そしていつしかグラウンドのホコリと自己の誇りと日本代表の誇りをもって日本代表監督としてピッチの芝生を踏みしめる時が必ずしや来ると思います。一緒に汗をかき砂まみれになって育て上げた選手の誇りと技術と信頼関係が結晶となり縦横無尽にピッチの中を駆け巡り勝ち取った勝利の中でしか中田選手の『悔しさ』は果たせないような気がします。

人はみな何らかの悔しさを胸に抱えて生きています。それを心の傷と呼ぶか湧き上がる原動力(モーター)と呼ぶかで人生は大きく変わっていくと思います。即行動を始める『直入れ起動モーター』もあれば徐々に調子を上げていく『インバーターモーター』もあり、また、あるところまでは一気に駆け上がりそこからマイペースな『スターデルタ起動モーター』もあります。人それぞれの生き方はあると思いますが『心のモーター』だけは常にグワングワンいわせておきたいものです。そしてもしもメンテナンスの必要なときは一声おかけください。当社ではすべての種類のモーターを大切に扱わせていただいておりますから…

それでは今日もご安全に！！

感謝！ 羽原篤史

